「相中相高百年史」より
（ 戦時体制下の相馬中学校　７ ）

７　出征兵士と続く戦死の悲報

（１） 教諭・卒業生の戦死

1936（昭 11）年の二・二六事件を契機として、日中戦争の進展、国際連盟の脱退、日独伊三国同盟の締結、日中戦争への突入と戦雲急を告げ、その黒い影は学校には忌まわしく忍び寄ってくる。
1938（昭 13）年の「国家総動員法」公布によって決定的となり、本校の先生、卒業生にも召集令状が相次ぎ、勇躍出征する人が多くなる。

若い教師には次々と召集令状がくるようになり、昨日までの長髪を五分刈りにして戦線へと発っていった。体育の先生は新任と殆ど同時に出征した。　（『相高新聞』相高物語）

馬城会でも「出征会員ニハ歓迎旗ト護身符トヲ贈ルコト出発ニ間ニ合ハナカッタ場合ニハ、護身符ノミヲ贈ルコト」（『馬城会記録』）と決議し、会員の武運長久を祈念している。
これと並行して、学友会決議として学校長が「出征父兄各位へ」と題して慰問文を書き、中村神社の護符とともに送付することにしている。

しかし、馬城会記録を披見して目につくのは、暗い忌まわしい戦死の報のみ続くことである。
その中で、1937（昭 12）年９月支那事変のため臨時召集を命ぜられた生物担当の繁在家申松教諭は、翌年９月 24 日、中国は山西省聞喜県煙約塞高地附近の激戦で不幸にも敵弾に倒れ、壮烈な戦死を遂げられた。しかして、12 月 27 日、国の為に殉ぜられた先生の御霊を迎え、本校講堂に祭壇を設け、厳かなる校葬を挙げた。

学校では慰霊祭が行われ、遺骨を抱いた夫人の姿を見て、われわれは戦争のいかなるものかを知らされ、居並ぶ参列者の紅涙を絞ったのである。　（『相高新聞』相高物語）

と当時の印象を寄せている。『学友会雑誌』第 36 号は、繁在家教諭の追悼特輯号を組み、先生の略歴、応召後の動静、校葬の様子と祭文（追悼文）、そしてありし日を偲ぶ記事と並んでいる。馬城会総集会でも追悼している。

『学友会雑誌』第 35 号には、中国大同駅停車場爆撃の帰途戦死を遂げた、故陸軍航空兵大尉羽根田勝信 (※1) の御霊を弔うための記事も見られる。羽根田大尉の町葬は長友で行われ、本校職員生徒一同参列したのである。
このような悲しい記事は次々と続き、枚挙に遑がないほどである。

（※１）昭和５年卒業　中村出身